
超小説版ケロロ軍曹 + black & whiteであります

百花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超小説版ケロロ軍曹 + black & white であります

【Nコード】

N7666M

【作者名】

百花

【あらすじ】

突如現れたロボットに誘拐された冬樹。

ケロロ小隊は夏美が家に帰る前に冬樹を救うことが出来るのか。疾風怒涛のファンタスティックスペースアドベンチャーが遂に幕を開ける。

オリジナル登場人物紹介

茨田 弥々華 まつだ ももか

17歳の女性。学校に行かず仕事をしている。

身長150cmで痩せ形。髪が短く、中性的な顔立ち。赤いつり目が特徴。

明朗快活で男っぽい性格。若干忘れっぽい。

英語がほぼ完璧に話せる。

一人称はあたし

「Appdsco」という団体に所属する「能力者」。

また最近はケロン軍・曹長に就任。以前からちよっかいをかけていたケロロ小隊に正式入隊した。
ガルル小隊所属の友人がいる。

Appdscoについて

主人公である弥々華はAppdscoと呼ばれる組織に加入している。AppdscoとはAbility person dispatching, space control office（能力者派遣・空間管理署）の略で

- ・能力者を依頼者に派遣する
 - ・様々な平行世界を管理する
- 事が主な仕事である。

また空間管理の一環としてケロン軍などに能力者を派遣。友好関係を結んでいる。

能力者について

弥々華やAppdscoに所属する殆どの人間は能力者である。

能力者とは、世界の万物が発するオーラと呼ばれるエネルギーを使い、個人にあつた能力を使うことが出来る。
また能力解放という技を使用するとその能力の本当の力を用いる事が出来る。

ハル＝エメリツヒ・ユウマ

この物語のキーパーソン。

宇宙人で「サテイエン人」と地球人のハーフ。

Play horse company社長。

Play horse companyで売られるロボット全ては
彼が設計した。

身長が高く2m近くある。

黒髪、金眼。

黒いスーツの上に白衣を着ることも多い。

オート メリイエン

ハル製作の人工知能。

Play horse companyのセキュリティー・経理・
経営を取り仕切る。

普段は社屋のマザーコンピューターの中にいる。

たまにホログラムとして現れる事もある。

愛称は「オート」。

Episode:0 prologue 始まりの日

「お父様」

夕焼けの橙色に満たされた書斎で遊馬珪一郎はゆっくりと振り向いた。

開け放たれたドアの空白には少年が1人立っている。

「ハルか。何の用だ？」

遊馬はゆつたりした口調で愛しい息子の名前を呼んだ。

「質問があるのです」

「なんだ？」

俯いていたハルは顔を上げると呻くような声を出した。

「完璧とはなんですか？」

Episode:0 prologue 始まりの日

完璧とはなにか。そう問われた遊馬は少し逡巡するかのよう
に顎を撫でるとほうと息を吐いた。

「来なさい……ハル」

ハルは少し跳ねて遊馬の膝の上に飛び乗ると遊馬の顔を見つ
めた。

「完璧と言うのは何にも欠点が無いという事だ」

「お父様。世界は完璧ですか？」

真摯なハルの瞳に遊馬は視線を逸らす。

「いや。完璧ではない」

「そうですか……」

悲しげなハルの顔を遊馬はそっと撫でた。

「世界は確かに完璧では無い。だがハル。君なら完璧な世界を作る

「ことが出来る知れない」

「お父様？」

ハルの頬に遊馬は自分の頬を付けた。

遊馬は囁く。

「私が死んだら、君に私の頭脳を全て捧げよう」

暖かく柔らかな体はとても心地良い。

「そして君は君のやりたいことをすれば良い」

「お父様。本当ですか？」

「もちろんだ。私は嘘は付かない」

「お父様みたいな頭脳があればボクは完璧な世界を作って見せますよー!!」

顔を林檎のように赤くしたハルを見て、遊馬は声を上げて笑った。

「お父様、笑わないで下さいよお」

「ハル」

遊馬の真面目な声にハルは険しい表情を解く。

「なんですか？」

「愛している。ハル」

「お父様？」

小さな命が消えて無くならないよう、遊馬は一層強くハルを抱き締めた。

T o b e c o n t i n u e d

Episode:0 prologue 始まりの日に(後書き)

父親と息子。2人の会話が後に生むものは……。

次回はケロロ軍曹キアラが本格的に登場します。

お楽しみに

e p i s o d e : : 1 s t a r t i n g c a s e 動き出す事件（前書き）

p r o l o g u e から 25 年後。 現在の地球に舞台は移る。

episode:1 starting case 動き出す事件

「がッ」

腹部に走る痛みに少女は苦悶の声を上げた。

「う…………ぐ」

地べたを転がり、呻きながら、少女は襲い来た鈍色の巨人を睨みつけた。

怒りと恐怖に満ちた、赤い瞳で。

Episode:1 starting case 動き出す事件

「弥々華殿お！！ やっと買えたでありますっ。新作のガンブラ」

青年とは思えないボーイソプラノが少女の耳を揺らす。

心底嬉しそうな声に、少女 茨田弥々華は視線を下ろす。

「ホントに嬉しそうですね。隊長」

「もっちらんでありますよっ！！ これ新作でありますよ。し・

ん・さ・く。しかも夏美殿がいないから組み立て放題でありますよ」

青年はガンダムのプラモデル、通称ガンプラの箱を持ち上げながら弥々華の周りを駆け回る。

「ほら、隊長。きちんと歩かなきゃ誰かに踏まれるよ」

「わーかってるでありますよ」

そう言いつつも相変わらず駆け回る青年に弥々華は呆れたような表情を見せた。

青年の名はケロロ。宇宙のケロン星というからやって来た侵略軍人で小隊を率いる隊長でもある。軍曹という階級も持っている。

とはいえ60cmにも満たない黄緑の体、地球で言うカエルに

似た顔、真っ白いお腹についた黄色い星　ケロンスターと黄色い耳付き帽というマスコットキャラクター的ルックスと変声期前の少年に似たボーイソプラノからは想像出来ない肩書きだが。

「ほら危ない隊長!!」

「ゲ……ゲロツ!!」

ケロロが振り返ると眼前に足。ムニリツと柔らかい音を立てケロロはハイヒールに踏みつけられた。

顔には当然足形。

「アンチバリアで一般人には見えないんだから……もちよい気イ使って歩かなきゃ駄目じゃん」

「痛つてえ」

手で頭を抑えるケロロを見た弥々華ははっきりと溜め息を落とした。

「ほら」

そう言いつつ弥々華はケロロの頭を掴むと頭に乗せる。

「こつちの方が楽でしょ？」

「弥々華殿……ありがとうございます」

「どういたしまして」

弥々華はかすかに顔を赤らめつつも平然とした顔つきで歩き出しました。

「ゲロ?」

「どうしたの?　隊長」

ケロロが上げた声に弥々華も思わず反応する。

「あれ。なんでありませんようか?」

「あれってなに?」

「空の上でありますよ。ほらもうちょい上」

ケロ口に促されるまま、弥々華はゆっくり視線を持ち上げる。

「ああ、なんか飛んでるね。飛行機かな？」

空を飛ぶのは豆粒ほどに小さな何か。

ただし飛行機にしては翼が無いしヘリコプターにしては静かだ。

「宇宙船でありましょうか。珍しいでありますなあ。こんな時間に」

「確かに珍しいかもね」

どこか飄々としたやりとりを交わすと、弥々華はまた歩き出す。

「なんにも起こんなきゃ良いけどね」

「なんか言っただでありますか？」

「いや別に」

弥々華はケロ口に見えないながらも小さな笑みを作って見せた。

なんとなく胸に走った不安を隠すために。

「はあっ……はあっ」

少年は路地を駆けていた。

頭頂部から飛び出した癖毛が歩調にあわせゆらゆら揺れる。

「なんで、僕が」 荒くなつた呼吸に混じる疑問に答えるものは背後に響く鉄のぶつかる音のみ。

「軍曹……」

少年は小さく吐き出した。

大切な親友の名を。

「うわああっ。危ないッ」

「は？ うわッ」

横を見る間もなく、体に走る衝撃。弥々華はもんどりうってずっこける。

頭にしがみついていたケロロも体を強打。3人を巻き込む大転倒だ。

「痛つてえ。っーか危ないだろ！！ アンタ、急に飛び出すな！」

ロクに相手の顔も見ず、俯いたまま弥々華は感情のまま声を荒らげる。擦りむいた肘がじりじりと痛い。

「じっじっご、ごめんなさい。急いでて」「あー！！ ガンプラがあ……つてあれ？ 冬樹殿。なんでここに」

ケロロの言葉に弥々華が顔を上げた。

「冬樹？」

少年は弥々華の顔とケロロの顔を交互に見ると、安堵の溜め息を漏らす。

「軍曹……弥々華さん。よかった。助かったあ」

少年、日向冬樹は2人に向かい表情を緩めた。

「助かったって何があったの？」

「変なロボットに追われてたんだ。本屋さんの帰りに」

「はあ」

弥々華はポカンとした顔で冬樹を見た。

ケロロは今にも泣き出しそうな顔で潰れたガンプラの箱を抱き締める。

「とにかく一度日向家に帰った法が……いいんじゃない」

弥々華の言葉を遮るように轟くのは鉄と鉄がぶつかり合うやまましい音。

それを聞いた冬樹は恐る恐る振り向き、弥々華とケロロは座ったまま背伸びし、3人はほぼ同時に凍りついた。

「まさか」

「あれでありますか？」

赤く光る1つ目が3人の背筋をなで上げる。メタリックな銀色の体はいかにも頑丈そうだ。背丈は2m前後。胴体も手足も太く、安定性は良さそうだ。

「どうしよう。軍曹？」

その言葉を引き金に動いたのは弥々華とロボットだった。

振り下ろす拳を蹴りロボットの後ろに回り込んだ弥々華は右手を振りながら叫んだ。

「黒白風華、発動！！」

収束するオーラは日本刀の形を成し弥々華の手に収まる。

「はッ！」

気合一閃。振り下ろされた刀はロボットの背中を浅く傷つける。弥々華は軽く後ろに跳躍して距離を取るとヌーボーと振り向いたロボットにニヤリと笑いかけた。

「来いよ？ 木偶の坊」

挑発。

それと同時に、ロボットは急加速。

馬鹿げたスピードで突進する。

「風華」

弥々華は黒白風華を横に構える。オーラが黒白風華にまとわり

つき

「招来！！」

オーラが作り出すモノクロの衝撃波によるカウンター。

成功に酔う間も無く飛び上がりロボットの肩を蹴る。

「風華繚乱！！」

頭を下にして袈裟懸けに打ち出した衝撃波が外殻を削る。

「浅い……ね」

着地。また地面を蹴り踵を返す。

狙うは、目。

「うわっ」

突き上げた刀は届かず、腕を掴まれる。

「ッ！！」

見開かれた目。後頭部から壁に打ち付けられ、息が止まる。

「弥々華殿！！」

「痛って」

額から、生暖かい液体が垂れ落ちた。視界が回る。

次の瞬間差す影。

「きじゅつたじゅつほうぎよへき忌術多重防壁」

伸ばされた左手と展開する透明な防壁。

それを突き破る銀の腕。

硝子の割れる音が響く。

間に合わない。逃げられない。

呪詛を込めた瞳。

弥々華の頭に衝撃が走る。

鈍い音。

弥々華の体から力が抜けた。

ロボットは弥々華の首を抑え付けるとゆっくり体を引き上げる。

弥々華の足が浮き上がる。

ロボットが拳を握り締めた。

「なにやってんじゃコラー！！」

ガンブラの恨み！！と叫びながらケロロはどこからか棒につ

いた棘付き鉄球 通称モーニングスターを取り出すとロボットの

頭にめり込ませる。

ロボットがぐらりと揺らぐ。

腕が緩み弥々華の体がずりりと落ちる。

弥々華はせき込みながら喉を押さえた。

「やった……」

ケロロはどこかにモーニングスターをしまつと自分の手を見つめた。

「やったであります！」

冬樹殿見てた？

見てた？」

「見てたよ。軍曹っ」

尊敬の念を込めた顔を向ける冬樹と照れくさそうなケロロ。弥々華はそれを横目に見つつゆっくり起き上がる。

「んで何者なんだろうね？ コイツは」

首を締められた恨みつとばかりにロボットを蹴飛ばし向きを変えろ。

ロボットはごろりと転がり仰向けになった。

「んー……このセンスの無いデザイン。ケロン軍の物じゃないでありますな」

ケロロもロボットを一瞥すると弥々華。

「そう言えば弥々華殿。頭大丈夫でありますか？」

「頭って……」

そう言っつて弥々華は何気なく額に触れた。

ぬるりとした感触。

手は当たり前のように血まみれだ。「そーいや、忘れてた」

少し青ざめながら弥々華はまた額に手をかざす。

「忌術、光癒リウヂ」

オーラをまとい光る手に癒される傷を、冬樹は興味津々と言わんばかりの自然で眺めていた。

「それでこれ、どうしたものでありましょつか？」

腕を組むケロロ、腰に手を当て立つ弥々華、顎に手を当てる冬樹。見下ろすのはもちろんあのロボットだ。

「ここにほっぽつとく訳にはいかないしね。分解バラす？」

「できるんですか？」

「多分ね」

「それじゃ 弥々華殿。頼むであります」
「了解」

弥々華は再度黒白風華を発動するとロボットの人間で言えば肩関節に当たる場所に刀を突き立てた。

「ん？」

「どうしたでありますか？ 弥々華殿」

「今……一瞬だけ目が光ったみたいな」

「気のせいじゃないですか？」

「だいたいけど」

弥々華は小さく呟き、また黒白風華に力を加える。

めぎめぎと筆舌尽くしがたい金属音。

肩に深い亀裂が入り始めたその時だった。

『#%\$~@ !~!』

「な!~!」

黒白風華から手を放し飛びすさる弥々華。

「嘘でしょ」

呆然とした冬樹。

「もう勘弁して欲しいであります!~!」

ケロロに至っては悲鳴を上げて後ずさりしている。

地球では発音出来ない音を立て、ロボットは再起動した。

「クソッ」

弥々華は吐き出すように毒づくくと真っ直ぐロボットに向かい突進する。

「忌術、闇爆あんぱく」

その名の通り、闇色のエネルギー弾が弥々華の手から発射、爆破する。

「隊長!~! 冬樹連れて逃げて」

そう叫びつつ黒白風華を握り、オーラを一気に流し込む。

「風華招来!~!」

音も無い衝撃波が肩を貫通し地面に窪みを付ける。

返す刀で関節を破砕。

引きちぎれたコードを残し腕が飛ぶ。

オイルが吹き出し返り血のように弥々華の顔を濡らす。

「ッ」

吐き気を催すような匂いに弥々華は顔を歪めた。体の動きが鈍るのが嫌でも分かる。

「ぐっ」

それが運の尽きだったかも知れない。ロボットの膝が弥々華の腹部にめり込む。

吐き出すのは赤い唾。

壁に頭をぶつけ、地べたに打ちつけられ意識が飛びかける。

苦悶の中、睨み上げる視線には、はつきりとした恐怖と怒り。

「はぐっ」

追撃として与えられた一撃はまたも腹部を狙うもの。

内臓が飛び出すような一撃に弥々華は完全に動きを止めた。

ブラックアウト。完全なる敗北だった。

「冬樹殿！！ こっち」

冬樹の手を引くケロロは素早く角を曲がる。

住宅街のド真ん中で荒い呼吸をしながら2人は走る。

あともう少し……もう少しで家だ。

そう思いながら2つ目の角を右に曲がる。

「ゲロッ！！」

「うわぁっ」

2人は巨大な何かにぶつかり転ぶ。

「嘘でありますよ！？」

ケロロの悲鳴。

冬樹は声もなく腰を抜かしている。

目の前には片腕の無いロボット。

「に……逃げるでありますよ!!」 冬樹殿

ケロロは冬樹の腕を引くが冬樹は動かない。

目を見開き、恐怖のまま動けない。

「冬樹殿」

ケロロの声にも答えず、魅入られたようにロボットを見詰める冬樹。

当のロボットはといえば地面を踏み鳴らす音を立て、ゆっくり2人に歩み寄る。

「冬樹殿に触るなッ!!」

ケロロは必死の覚悟でモーニングスターを振り下ろすもあっさり受け止められる。

「ゲロオッ!!」

そのまま壁に投げつけられたケロロは悲鳴を上げて壁に衝突。目を回しながら地面に落ちる。

「軍曹ッ!?!」

冬樹の目に光が戻る。

必死でケロロのところに駆け寄ろうとする冬樹の細い腰をロボットは掴む。

「冬樹殿!!」

「軍曹おっ!!」

飛びかかるケロロをはねのけたロボットの腹部が開く。ぼっかり口を開けた空洞に冬樹はひょいと放り込まれた。

腹部は、閉じられた。

ロボットは数秒静止すると、背中に光学装置の羽根 飛行ユニットを展開。

凄まじい勢いで空の向こうに飛んでいく。

「冬樹殿オー!!」

ケロロの悲鳴が辺りに虚しく木霊した。

T o b e c o n t i n u e d

e p i s o d e : 1 s t a r t i n g c a s e 動き出す事件（後書き）

惨敗を期した弥々華と大切な友達を奪われたケロロ、そしてさらわれた冬樹。3人の運命や如何に。

感想やレビュー、お待ちしています。

弥々華が一番始めに感じたのはザラリとした頬に当たる感触だった。

「んぐ……」

目を開けるとそこはあの路地。

「痛って」

腹立たしげに体を起こすと、腹部に走る鈍い痛み。弥々華の眉間にシワが寄る。

腕の力が抜け頭がまた地面に打ちつけられた。

「一体なんなんだよ」

ごろりと寝返りを打つと切り取られた蒼穹そうきゆうが目に映る。

どのくらい気絶していたのだろうか。

ゆっくりビルの壁を伝い体を立ち上がる。

骨折はしていないようだ。

それが不幸中の幸いと言うべきか。

「とにかく隊長のここに行かなきゃね」自分を奮ふんい立たせるように呟くと弥々華は唾を飲み込み歩き出した。

Episode : 2 A search network
begin 冬樹を探せ

「隊長」

緑の隊長は案外すぐに見つかった。日向家から少し離れた道の端に倒れていたのだ。

「隊長!!」

「弥々華殿お？」

よかった、生きてる。

小さく安堵のため息を吐き出すと隣にかがみ込む。

「隊長、無事？」

弥々華がすつと頭に手を乗せると初めてケロロが泣いている事気がついていた。

「ひぐつ……我輩は無事ではありますが……えぐつ……冬樹殿が」

「冬樹がどうしたの？」

「あのロボットにさらわれちゃったんでありますよぉ〜!!」

「止められなかったのか……」弥々華は妙に頭が冷静であることに内心驚きながらケロロを持ち上げた。

「一度日向家に戻ろう。ここで嘆くより次の行動をした方がいいと思う」

ケロロを頭に乘せた弥々華はすくつと立ち上がる。

ケロロは鼻を嚙り涙を拭うと1つ深呼吸をした。

「ケロロ小隊を結集させるであります。冬樹殿を助けに行く」

ケロロの言葉を聞いた弥々華はニヤリと口角を上げた。

「了解、隊長。んじゃちょっと飛ばしますか？」

「頼むであります」

「イエッサー」

返事を返した弥々華は右足に力を込める。収束させたオーラを解き放つ推進力で急加速。弥々華は車よりも早く姿を消した。

そして日向家。

ケロロの私室である地下室の更に下、広大とも言える地下空間に作られた地下秘密基地。

宇宙船のブリッジを模した司令室に集まるのはケロロ小隊とその協力者の面々だ。

「で、なんの用だ？ ケロロ。また下らん作戦でも思いついたか？」

口火を切った赤いケロン人はギロロ伍長。体色にあった茶色い帽子と顔を横切る古傷、肩からたすき掛けにしたベルトが特徴的な男だ。

「こんなに急になんのようですか？ 軍曹さん」

舌つ足らずな甘いソプラノはタママ二等兵。ケロロ小隊の中でも一番幼く、唯一オタマジャクシに似た尻尾を持つ幼年体の姿をしている。

「さつさと話しな。隊長？」

嫌みを含んだ絡みつく声はクルル曹長。ケロロ小隊の作戦通信参謀を勤める黄色い男だ。彼だけが巨大なヘッドホンと渦巻き眼鏡を身に付けている。

「実は……冬樹殿が誘拐されたのであります」

「犯人の目的は不明。分かっているのは犯人がロボットって事だけだね」

ケロロの言葉を引き継いだのは弥々華だ。

「なんと！！ それは」

「それは大変です！！ ってゆーか非常事態！？」

「ひ……ひどいよお」

忍者口調の男はドロロ兵長。青い体を覆う口布と頭巾が忍者っぽさを引き立てている。

妙な四字熟語を発したコギヤル少女はアンゴルモア。ケロロ小隊のオペレーターだが、実は1999年に地球を破壊しに現れた恐怖の大王なのだ。

「それでその誘拐された時間は？」

「2時間前くらいであります」

「2時間前って朝の10時くらいですかあ？」

「多分それくらいかも」

「クルル曹長。全力を上げて冬樹殿の居場所を突き止めて欲しいで

あります」

「クックゥ。りょーかいだぜエ」

クルルは持ってきていたノートパソコンを開き、なにやら打ち込み始める。

「どうでありますか？　クルル」

「携帯電話の電波を追ってみたがおよその場所しかわかんねえな」

「およその場所？」

「アンドロメダ銀河……フレイドトス星団っつーところまでは掴めたな」

「だがそれでは時間がいくらあつても見つからんだろう」

クルルはしばらく沈黙するとふと顔を起こす。

「おい隊長、弥々華？」

「なんでありますか？」

「何？」

「ロボットの型番号とか覚えてねえか？」

「型番号って言われてもそんなん覚える暇ないよ……」

逆上に近い形で弥々華がまくし立てる。

一方、ケロロは顎に手を当てしばし逡巡したのち手を叩いた。

「そうだ！！　弥々華殿が落とした腕があります」

「腕だア」

「ロボットの腕を切り落としたんでありますよ……　ね、弥々華殿？」

「あ、思い出した。ここ斬ったんだ」

そう言いながら弥々華は左肩を右手で触る。

「ああ、それがあや製造元は分かるな」

「それじゃあたし取ってくる」

そう言い残し、弥々華は司令室から姿を消した。

数分後。

帰還した弥々華が持ち込んだロボットの腕には多量のコードが繋がっていた。

「こりゃ驚いたな」

「どうしたのだ？　クルル」

「このロボットはPlay horse companyって会社で作られたもんなのだがよ。これは社内でしか使われていない警備ロボットだぜエ。しかも売り出されたり貸し出された記録は一度もねえ」

「社内でしか？」

「使われてない？」

ケロロとタママがオウム返しのように呟く。

「あ……分かった」

「弥々華殿分かったんでありますか」

「社内でしか使われてないってことはPlay horse companyの社員がこのロボットを用いて犯行に及んだって事？」

「クツクツ。大当たりイ」

クルルはどこから取り出したのか福引きの当選ベルを取り出し鳴らす。

「それじゃつまり冬樹殿はそのPlay horse companyにいるって事でありますか」

「ま、そうなるだろうな」

「これで冬樹殿を助けに行けるでありますな」

ケロロはやっと笑みを取り戻しガッツポーズを決める。

「それじゃケロロ小隊、総力をあげて日向冬樹救出に向かうでありますー！！」

「「「「「了解！！！！」」」」」

「ってゆーか一致団結？」

かくして日向冬樹救出へ向け、一丸となったケロロ小隊であった。

「あれ……そういやドロロは？」

「ひどいよ。みんなあ」

ケロロの視線の先には鬱々としたオーラを背負いトラウマの海に沈むドロロの姿があった。

中に浮かぶ多量の光学キーボードにすらりと長い指が踊る。

モニターには難解かつ長つたらしい計算式が現在進行形で打たれていた。

指を動かす男の顔は冷たくも端正だった。

「ハル・ユウマ社長」

ドアが開き現れた女性をハルは一瞥する。

「何の用かな？ 入室を許可した覚えはないが」

ハルの手は止まらない。

「地球にロボットを送られましたね」

ハルの手が止まる。

「それで？」 「現住種族を格納した状態で帰還しました」

「分かった」

ハルはモニターに保存をかけるとデスクから立ち上がる。

「おい」

「何でしょうか」

振り向いた女性の腕をハルは固く握る。

「宇宙船ポートは立ち入り禁止と明言したはずだが」

「あ……えっとそれは」

「言い訳は不要だ」

ハルは顔を女性の顔に近付ける。

「残念だよ。君の様に優秀な部下を失うなんてね」

ハルは腕を放すと踵を返す。

「クビですか」

「いや違う。計画の一端すらばれてしまうと厄介なものでね」

「計画？」

「君はロボットと被験体を見た。口封じには十分見合う情報を手に入れてる」

「なんの事ですか！？ 社長！」

怪訝な顔をした女をハルは冷徹な視線で見据えた。

「簡単な事だ。オート、この女を殺せ」

『yes master』

電子的な音声が部屋を満たす。

次の瞬間乾いた音が鳴り響いた。

壁に鉄の筒が収納される。

「あ……が……」

どさりと音を立て、女性は倒れる。眉間には赤黒い穴。

血がカーペットを濡らしていく。

「オート。死体と汚れ物を処理。それが終わったら被験体を転送しろ。あとコイツの記録改竄もしておけ。死因は事故死」

『yes master』

ハルは部屋がキレイになって行くのを横目で見つつ、先程中断した作業を再開した。

「もうすぐだよ父さん。もうすぐあなたとの誓いを果たせる」たった1人呟くとハルは静かに、そして激しく喧しい笑いを吐き出した。

T o b e c o n t i n u e d

E p i s o d e : 2 A s e a r c h n e t w o r k t o b e g i n

さらわれた冬樹の運命は？

ケロロ小隊は冬樹を助け出せるのか？

そしてハルの目的とは……。

次回のEpisode3もどうぞ期待！！

感想、一言でもいいのでお待ちしています。

Episode : 3 Mission start 潜入開始

「凄い」

身を乗り出し眺める景色は漆黒の闇に浮かぶ青い星。いわゆる地球だ。

「生きてる間に宇宙に行けるなんて思わなかった」

「大人しく座っている、弥々華。遊びに行くわけでは無いぞ」

子供の様に目を輝かせる弥々華にギロロは苦言を呈す。

「はい」

弥々華は面倒臭そうに返事を返すと体を捻り座り直す。

「で各自の分担でありますけど……ドロロ」

「なんでござるか？」

自分の座席に正座していたドロロがケロロに視線を移す。

「ドロロには隠密に単独潜入を頼みたいであります」

「了解でござる。隊長殿」

「次いでギロロと弥々華殿。その火力と破壊力を持って囮になって欲しいであります。頼めるでありますか？」

「派手に暴れりゃいいんですよ」

「任せておけ」

片目を閉じ茶目っ気のある表情を浮かべた弥々華と真面目顔で返答するギロロ。

「タママ二等は我輩と一緒に3人の後に潜入。冬樹殿を探すであります」

「了解ですう〜!!!」

タママは敬礼と共に元気に返事をする。ケロロもそれを見て少し背筋を伸ばす。

「んでクルル曹長とモア殿!!!」

「なんですか？ おじさま」

「2人には我輩達5人のオペレーション、平行して情報収集を頼み

たいであります」

「了解です!!　　ってゆーか平行作業？」

「任しときな」

ケロ口はそれを聞き小さく頷くとすつくと立ち上がった。

「それじゃ、到着までの3時間。各自準備をしておくように!!」

ただ休めるときには休んどくでありますよ？」

「了解!!」「了解!!」

Episode : 3 Mission start 潜入開

始

「う……ん」

日向冬樹が目を醒ますとそこは一面の暗闇だった。

「どこ……どこだろう?」

冬樹は呟きながら自分の周りの壁に触れる。

そこ随分と狭い場所だった。

横幅は自分が手を延ばした時よりも短く、天井も立ち上がれば頭をぶつけてしまうだろう。

冬樹は手当たり次第そこかしこに触れながら周りを見回す。

目が慣れてくると、自分の手が見えた。

「そつだ!!　　携帯があつた」

冬樹は自分のポケットを探り携帯電話を取り出すと開く。

ぼんやりと周囲を照らす液晶を見てみると気分が落ち着いてきた。

冬樹はしばらく液晶を見つめていた。

「軍曹に連絡しよう」

自分の無事を知らせなくちゃ、冬樹は携帯電話を耳に当てた。

【もしもし、軍曹？】

「冬樹殿！！」

ケロロ小隊全員の目がケロロに吸い寄せられる。

「冬樹からか？」

「そうであります」

ケロロの答えを聞き、小隊員はほっとため息を吐き出す。

「それで冬樹殿。今どこに？」

【それが分からないんだ。目が覚めたら狭いところにいたんだけど】
「どこも怪我してないでありますか？」

【うん、平気だよ。軍曹は大丈夫？】

「冬樹殿、必ず助けに行きます。だから、危ないことしっちゃダメでありますよ」

【軍曹……僕】

その言葉を遮るようにノイズが走る。

「冬樹殿！！」

【軍曹……は……平……ちょ……これ！？】

冬樹の声が悲鳴に変わる。

「冬樹殿？ 冬樹殿！？」

【うわあああ！！】

その悲鳴を残し、電話は切れた。

「クルル！！ スピード上げて！！ 冬樹殿が」

「わーってるぜ。隊長」

クルルがいくつか指示を出し、宇宙船はスピードを上げた。

「う……なんだっただの」

「お前が地球人か」

「へ？」

腰を抜かしへたり込む冬樹は恐る恐る頭を上げた。

「あなた、誰ですか？」

「ハル」エメリツヒ・ユウマだ。この会社の社長兼開発チーフ」

「ユウマ……さん？」

ハルは不遜な瞳を冬樹に向ける。

「なんだ」

「なぜ僕をさらったんですか？」

「地球人として平均的な身長と体重……一点集中型としてはトップクラスの頭脳……激しくも抑制出来ている感情表現」

つらつらと述べるハルに冬樹は怪訝な顔をする。

「総合的に言えば私が必要だと思っていた被験体だ。お前はな」

「被験体？」

「簡単に噛み砕いて言えば実験材料だ」

「実験材料お？」

ポカンとした顔をした冬樹。

「実験は翌朝だ。それまで最後の時を……ん？」

ハルは冬樹が握る何かに注目した。

「なんだ？ それは」

ハルは長い指先で冬樹が握る携帯電話を奪い取るうとした。

「これは渡せません」

冬樹は携帯電話を自分の背面に隠す。

「地球人如きに抵抗されるとはな。オート……あれを奪い取れ」

「オー……うわっ」

考える間すら無く冬樹は壁から出てきた縄によって宙づりにされる。携帯電話は指先から零れ落ち当然地面に落ちる。

「世話をあまり焼かせるなよ。オート、こいつをどこか使わない部

屋に放りこめ！！ 施錠は厳重にしておけよ」

『yes master』

冬樹は宙づりにされたまま、部屋から連れ出された。

ハルは小さく鼻を鳴らすと、作業台にどすとりと腰を掛けた。

「オート。次の仕事だ。これの解析を頼む」

『yes master』

「ここがそうなの？」

ビルの屋上を落ち着き無くうろつく弥々華が誰とも無く聞く。

ここは『サティエン星』。冬樹の出す電波とロボットの腕が導いた惑星だった。

「いや。違っております」

そう言ったケロロは弥々華の手を引くとほかのビルを指差す。

「あの一番高いビルが『Play horse company』

の本社ビル。あそこに冬樹殿がいるんであります」

ケロロはどこか遠い目で囁くときり直す様にぐるりと振り向く。

「さて……んじゃギロロと弥々華殿、出陣頼むであります」

「了解」

弥々華とギロロは敬礼を返すと、ギロロは光学式の飛行ユニットを取り出し飛び上がる。弥々華と言えばビルの端から跳躍し、何も使わずに空を飛んだ。

「行ったでありますな」

ケロロは小さく吐き出すと、タママとドロロに振り返る。

「ドロロ兵長は騒ぎが始まったら、タママはドロロが潜入したのを確認したら一緒に出るでありますよ」

「了解」

2人もまた敬礼を返すと、ギロ口と弥々華が潜入したビルを見詰めた。

「おい、弥々華」

「なに？」

平行して空を飛ぶギロ口に弥々華は視線を移す。

「これを持って行け」

そう言つて投げ渡すのは彼が愛用するビームライフルだ。

「引き金を引けば弾が出る。弾が無くなれば倉庫に自動転送される。威嚇にもなる。使え」

「サンキュ。引き金引きゃ良いのね」

「ああ」

弥々華は空を飛んだまま腰のベルトに銃を差し込んだ。

「それで侵入経路だが」

「考えんのめんどいしどうせ罠なんでしょ？ あたしたち」

「ああ。そうだが」

「それじゃ、突っ込もう」

「な……」

あまりにも戦略を無視した案にギロ口は絶句する。

「ほら行くよ」

弥々華は何のためらいも無く、ギロ口の手を取ると、空いていた左手を伸ばす。

「黒白風華発動！！」

握り締めた日本刀を振り上げる。

「風華繚乱ッ！！」

モノクロの衝撃波がガラスを突き破り、2人はそこに突っ込んだ。

「な……何をやってる貴様はア!!」

「堂々と潜入」

「この馬鹿者おツ」

あまりにも平然とした弥々華にギロ口は怒り心頭。

「貴様、ここではだなあ」

「つつさい」

相変わらずの態度で弥々華はドアに歩み寄ると勢い良く開けた。

「隊長からは囮になれって言われてんでしょ？ それならいつち

よ派手に行った方がイイんじゃない」

悪戯っぽい笑みを浮かべた弥々華にギロ口はあからさまなため息を
もらした。

『warning warning』

「どうした？ オート」

作業台に向かい視線を下ろしていたハルが顔を上げる。

『Invader appearance Invader appearance』

「侵入者か。場所は？」

『An invader is in the 7th conference room』

「第7会議室か。分かった、オート。警備システムをフル稼働。塵
1つ外部にももらすな。あとは外部からの侵入者は即刻捕らえるよう
に。完璧にこなせ」

『yes master』

「お……始まったでありますな」

双眼鏡を覗くケロロが小さく呟く。

見詰める先には火を噴くビル。

「おお派手ですねえ」

爆煙がケロロにひりひりするような戦場の匂いを運ぶ。

「それじゃ我輩たちも出撃するでありますか？」

「了解ですう！！　腕がなるですねえ」

ケロロはどこか冷静に、タママは拳を鳴らしながら、2人は飛行ユニットを起動させた。

廊下が煙で満たされる。

弥々華の鼻はすでに硝煙の臭いで麻痺し、耳は銃声で遠くなっていた。

だが止まるわけにはいかない。

弾幕の海に飛び出すと、ロボットの首を切り落とし破壊していく。

ギロロが撃ち出す銃弾は冷酷無比。弥々華の斬撃も右に同じだった。

「ねえ、ギロロ」

「なんだ？」

「違和感あんだけど」

「この警備ロボットの多さか？」

ギロロが撃ち出す銃弾がロボットの胸や頭を撃ち抜く。

「それもそうだけど……それだけじゃない」

弥々華はロボットに蹴りを入れ倒れたところで頭を突く。

「人がいないの」

「人だと？」

ギロロは周りを見回す。

確かに人気は無い。と言うよりは生気が感じられない。

「確かに、だがそれはケロロやドロロがなんとかするだろう」

そう言ってギロロはどこからかビームソードを取り出すとロボットを真つ二つに切り裂いた。

「冬樹殿お」

「フツキ」

ケロロとタママは薄暗い廊下を搜索していた。

「なんだか不気味な場所でありますな」

「本当ですねえ」

どうにも人の気配の無さが気にかかり、ケロロとタママは身を寄せ歩く。

【おい】

「「ぎゃあああッ!!」」

突然耳打ちされた声に2人は飛び上がった。

「幽霊出たア!!」

「ナムアマダブツ、ボクだけは助けてくださあい。軍曹さんの方が美味しいですよ」

「タママ二等の方が美味しいでありますよっ!!」
我輩なんて骨と皮だけ」

「軍曹さんヒドいですよ!!」

【何言ってるんだ……アンタら】

「「え」「」

ケロロとタママは思わず顔を見合わせ、耳に手を当てる。

「クールの（曹長／先輩）？」

【モチコース】

声の主は通信機越しのクールだった。なんてこと無い事実には2人は肩を落とす。

「ところで、なんの様でありますか？　クール曹長」

腹立たしげにケロロが呻けば帰って来たのはクールの笑い声。

【見つかったぜエ？　日向冬樹がヨ】

「本当でありますか？」

【ああ、その近くだ。そこ左に曲がんな？】

ケロロとタママは足を止め、左側を見やる。

「本当にこっちでありますか」

クールの応答は無し。

ケロロはため息を1つ吐き出すと、タママの手を引き廊下に入っていった。

T o b e c o n t i n u e d

E p i s o d e : 3 m i s s i o n s t a r t 潜入開始（後書き）

ケロ口達を呼ぶ冬樹。

果たしてケロ口達は冬樹を助けられるだろうか？

そして弥々華が感じた違和感とは。

次回 E p i s o d e 4。お楽しみに。

感想、お待ちしています。

一言や荒らしを除く批評でも構いません。

E p i s o d e : 4 t r a p 断たれた希望（前書き）

連絡

E p i s o d e : 3 の一部改定を行いました。最後の部分が変更されています。

Episode : 4 trap 断たれた希望

「本当にこつちでいいんでしょうかね？」

「クルルを信じるしかナイっしょ」

2つの足音が静かな廊下に響く。

先ほど通信が切れて以来声が聞こえない。

じりじりするような焦燥感が2人の身を焦がす。

【よお隊長、ガキ。聞こえるか】

鮮明に聞こえた声。

「クルル」

ケロロとタママは半ば無意識に軍帽を抑える。

【そこ真っ直ぐいって右側の部屋に冬樹はいるはずだぜ】

「了解であります」

ケロロは見えないクルルに敬礼を帰すとタママの手を引き歩き始めた。

Episode : 4 trap 断たれた希望

「あぶねっ」

弥々華は両手を伸ばすと前転。開け放たれたドアに飛び込む。

弥々華の背中に爆音が轟く。

ロボットの断末魔が確かに聞こえた気がした。

「暴れすぎじゃないの？ ギロロ」

微苦笑のまま1人ごちると飛び上がり背後のロボットに回し蹴りを食らわせる。

着地して廊下に飛び出すとそこは惨状。

「すっげ……ホントに派手にやったねえ」

焼け焦げた床に立つ赤い悪魔にため息を漏らす。
「どうやらここに来た警備ロボットは全て破壊出来たようだ。」

「さて冬樹殿お！ ドアから離れてるでありますよお」

ケロロの視線の先には巨大な黒いドア。

クルルから指示された部屋はここだった。

「タママ二等」。お願いであります」

「了解です」

ケロロはすたすたとドアとタママの間から離れる。

タママは大きく大きく息を吸い込む。

「タママインパクト!!」

ドスの利いた声と共に吐き出された黄色い光線が鉄のドアを突き破った。

「お見事であります」

肩を叩くケロロにタママは「てへ」と照れて見せた。

先ほどまでの血走った目や鬼気迫る表情とは大違いだ。

「さて冬樹殿を助けて帰るでありますよ」

そう言つてケロロはタママの手を引き、部屋の中に入る。

「冬樹殿！ 助けに来たでありますっ!!」

「軍曹……来てくれたんだね」

見た目からして固い椅子に腰掛けていた冬樹が立ち上がる。

「冬樹殿おっ!!」

「軍曹お」

立ち上がった冬樹に飛びつくケロロ。

「あり？」

「どうしたんですか？ 軍曹さん？」

抱き付いたケロロは目を見開き冬樹の顔を注視した。

「なんでありますか？ この違和感」

「どうしたの？ 軍曹」

ケロロは冬樹の顔に触れる。

「誰でありますか？ アンタ」

ケロロの言葉に刻まれたのは明らかな敵意。

「なにいつてるの？ 軍曹」

「アンタは冬樹殿じゃ無い」

冬樹の腕を振り解き、地面に降りるケロロ。

「答えてほしいであります。アンタ誰？」

冬樹は静かに俯く。

【完璧なはずでしたがね】

じじじと音を立て、揺れる冬樹。

【彼はオートシステム。ホログラムです】

響く言葉は冷たくどこまでも高圧的だ。

【初めまして、私はハル ユウマ。あなたはケロン星の軍人とお見受けしますがいかがでしょうか？】

「ご明察でありますな。ハル殿。我輩はガマ星雲第58番惑星 宇宙侵攻軍特殊先行工作部隊隊長 ケロロ軍曹であります」

【御丁重な自己紹介をどうも】

スピーカーの向こうで男は忍び笑いを漏らした。

「何が可笑しいでありますか？！」

【いや、あなたの方が私の考えた畏にはまってくれたと言う事実がうれしくてたまらないのです】

「な……なんです」

「 軍曹さぁん!!！」

ケロロの言葉を遮り、タママがケロロに抱きつく。

「どうしたでありますか」

「なんか来たですっ!!！」

「なんか？」

タママに促されるまま振り向いたケロロは凍りついた。
「こりはやバ……くね？」

「おじさま!! 聞こえますか? おじさま!!」

モアが必死にマイクに向かい呼び掛ける。

「ダメです。反応ありません」

「そうか」

クルルは相変わらずの表情でキーボードを打ち続ける。

「至急回線切り替える、ギロロ先輩に連絡」

「了解です」

モアもキーボードを打ち、2人に回線を繋げ直す。

「おじさま……」

モアの青ざめた顔をクルルは横目に見た。

「あ……クルルさん!! 通信が入りました。受けますか？」

「ん」

クルルの返事を聞き、モアは通信を受け取った。

モニターに映し出されたのは端正な顔をした青年だった。

表情は皆無と言えるレベルの無表情だ。

【初めまして。皆さん】

「アンタがPlay horse companyの社長……ハル

ユウマか？」

【情報がお早いですね。それであなたは誰ですか?】

「くっく。さあな」

【そうですか。まあいいです。1つ質問がありました。連絡をさせて
頂きました】

「質問だア？」

【はい】

ハルの表情は相変わらず読めない。

【質問したいのは……あ、丁度来ましたね。オート、こっちに連れてこい】

モニターの前に引きずり出されたのは、ケロロとタママだ。

「で？」

【彼等の他に我が社に侵入した者は何人いる？】

「く〜く〜く〜」

【何がおかしいのです】

「いやあ、アンタがあんまりにもテンプレな質問してくるんな。ついつい可笑しくなっちゃった」

【そうですか】

ハルの表情は相変わらず読めない。

「2人だ」

【赤いケロン人と刀を持った地球人ですか？】

「ああ」

【彼等を除けば？】

「あとはいねエな」

【御協力感謝します】

その言葉を最後に、通信は途絶えた。

「モア」

「何ですか」

「ドロロ先輩に通信。ギロロ先輩の通信は切れ」

「はい」

クルルは返事を聞き、また笑いをこぼす。

「さアて……逆転劇を始めるとしますかねエ」

クルルのヘッドホンから飛び出す多量のケーブル。

「モア。道具を一式持って客室フロアに行きな。そして俺が良いつうまで入ってくるな」

「り……了解です」

モアは自分の身の回りの物をかき集めるとコックピットを後にした。
「そろそろ本気でいくぜ」
クルルの戦いが始まった。

【その2人】

廊下を疾駆する2人に届く、通信。

【止まりなさい】

「誰だ？」

廊下に轟くような大声に、2人は足を止めた。

【あなた方の隊長と部下1名は預かりました】

「えっ！！　　嘘お」

「しくじったか」

【彼等の命が惜しければ、直ちに降伏しなさい】

「どうしよ……ギロロ」

「捕らえられているのはケロロ達だけでは無いだろうが……だが」

腕を組み悩むギロロ。

「ちよ……ひゃっ！！」

弥々華の形容し難い悲鳴に、ギロロはそちらに目をやる。

「なに？」

そこにいたのは『片腕の無いロボット』。地球で冬樹をさらったそれがいた。

「クソ」

ギロロは抵抗しようと銃を転送する。だがその前に体を掴まれ、開いた腹部に放り込まれた。

「な……んだ」

真っ暗な室内と揺れる感覚に2人はなすすべも無く座っていざるを

得なかった。

「おわっ」

「きゃっ」

「ギロロ！ 弥々華殿！」

「ケロロか」

「隊長……タママ。生きてる。良かった」

ロボットに吐き出された2人が見つけたのは地面に座っているケロロとタママだった。

「貴様ら……何を呑気にしている」

「あ……いやそれは」

沸点寸前のギロロにケロロはしどろもどろ。

キれるのも時間の問題と弥々華はため息を吐き出す。

「それでタママ。ここどこなの？」

「実はボクにも分かんないんです」

タママが首を傾げたのを見て、弥々華は天井を仰ぎ見た。

そこは巨大なモニターだけがある狭い部屋だった。

ドアらしき物はあるが自動式に近いようで開かない上、窓も無い。完全な密封状態で心なしか息苦しい気がした。

「だあーからギロロがもつと囃らしく戦わないのが悪いんでしょうが」

「貴様が油断しなければこんな事にはならんかつ……た？」

ギロロの語尾が裏返る。

モニターが作動し眩しい光を放っていた。

「なんですか？」

タママが首を傾げる。

無理もない。

画面は椅子と机を撮すのみで、人影は無い。

「あ、誰かきたであります」

ケロロの言葉が指す通り、1人の男が椅子に腰掛けた。

【初めまして。ケロロ軍曹とその部下の皆さん】

「もしかしてアンタはハル殿」

【はい。そうです】

ハルはにこりと笑みを浮かべる。

【あなた方にそこに集まって頂いた理由は他でもありません。死んでください】

不意にモニターが切れる。

次の瞬間開いた扉から現れたのは沢山の警備ロボット。

無個性に沈んだ鈍色の集団に、ケロロ小隊は後ずさった。

「もうロボットはこりこりであります」

「そんな事を言つとる場合か！！」

「来るよ」

黒白風華を構えた弥々華の一言が戦いへのゴングとなった。

T o b e c o n t i n u e d

E p i s o d e : 4 t r a p 断たれた希望（後書き）

ケロロ小隊vsロボット軍団。

ケロロ小隊は彼らに勝つことは出来るのだろうか？

そしてクルルの戦いとは……ハルの目的とは……。

謎を残しつつもE p i s o d e : 5。

待て次回！！

感想を募集中です。

荒らしを除く批評や、一言でも構いません。

お待ちしております。

Episode : 5 scheme ハルの野望

「どうすんだよ!!」

弥々華は腹立たしげに叫ぶと、下から上、斜めに刀を振るう。よろけたロボットを黄色い光線が吹き飛ばす。

「一度逃げた方がいいんじゃないですか!？」

ケロロは絶叫しながら得物であるモーニングスターを振り回す。

「でもどうやって逃げるんですか」

タママがロボットに食らわせたのは踵落とし。

「知らんがこいつらを倒すしか方法は無かるう。伏せる!!」

ギロロはどこから出したかロケットランチャーを乱射した。

熱をまとった爆風が部屋を焼き焦がす。

「こんな所でそんな物を使うバカがどこにいるでありますか!？」

軍帽を抑えうずくまっていたケロロが悲鳴を上げた。

その真上を飛び越えロボットに斬りかかる弥々華。

「クソ。コイツら斬っても斬ってもキリがねえ」

腹立たしげに呻きつつ背後の敵に刀を突き刺す。

「無限増殖でもしてるのか?」「そんな筈は無かるう」

いつの間にか弥々華の背後にいたギロロが返事をした。

「だが確かに数は多い。こちらの不利に変わりは無しか」

Episode : 5 scheme ハルの野望

ぐらりと地面が揺れる。

冬樹は思わず壁に手を付いた。

「軍曹」

かすかに鼻を突く煙の匂いのおかげで冬樹はケロロ小隊が戦っている事を知っていた。

「ここから出なくちゃ」

どこか冷静に冬樹は脱出を試み始めた。

脱出先は部屋にあった排気ダクト。よじ登ると這って歩けば十分動けそうな場所だ。

「よし」

冬樹は気合を入れると必死で排気ダクトに飛びついた。

「うわっ」

指先が滑り、落ちそうになるがなんとか持ちこたえる。

力を込めよじ登るとやっと上半身がダクトに入った。

足をかがめ、冬樹はうつぶせの形でダクトに入り込む。

冬樹は慣れない四つん這いのままダクトを進んでいった。

「ッ!!」

「タマッ!!」

「ゲロッ!!」

「うぐっ!!」

4人は壁に音を立て叩きつけられた。

ロボットは彼らを包囲するかのようになじり寄る。

ピンチもピンチ。大ピンチも良いところだ。

ケロロに至っては脂汗を流し蛇に睨まれたカエル状態になっている。

「だ……誰か助けてえー!! であります」

しどろもどろになって叫んだケロロにタママとギロロは白けた目つき。弥々華に至っては頭を抱えている。

「だっってこうなりや神頼みしか」

言い訳を述べ始めたケロロの言葉を遮るように、金属がこすれる音が響く。

振り向けばそこには今し方残骸になったロボットの姿。

「ゲロツ!? 誰でありますか」

「遅れて申し訳ないでござる。隊長殿」

凜とした低めのアルトが全員の視線を1つの方向に誘つ。

「……ドロロ(?! /先輩!!)」「」「」

短刀を収めた収めた青い忍に全員が歓喜の声を漏らす。

その姿はまさに救世主だった。

「どうしてここが分かつたんですか？」

「モア殿の音声案内のお陰でござるよ。タママ殿」

その一言を聞いたタママは目を血走らせ殺気立つ。

「それで冬樹殿の居場所は？」

「現在排気ダクトを移動中との事」

「排気ダクト？」

弥々華が緊張感の無い声で聞き返す。

「左様。冬樹殿はそれで脱出されるようにござる」

「よし、では通風口まで辿り着ければ冬樹と合流できると言つことだな」

「そうでござるよ。ギロロ殿」

「それじゃ総員通風口にレッツゴーであります」

「各々返事を返したケロロ小隊の面々は小走りで部屋を出て行った。

「はあ……まだ付かないや」

冬樹は排気ダクトの中、埃まみれのため息を吐き出す。

腕と膝は痛みを放っていたがまだ脱出の意志は消えていない。

冬樹はまた前に前に進んでいく。

「あれ？ 何だろう」

冬樹は首を傾げた。

目の前には淡い光を放つ床。

「出口かな？」

冬樹はゆっくりとそちらににじりよると下を覗き込む。

そこは薄暗い部屋だった。

かすかな消毒液の匂いも漂っている。

「何の部屋だろう」

人の気配は皆無に近い。

冬樹は好奇心のまま床を開けると足を下ろした。

「痛たた」

飛び降りる。と言うよりは地面に激突するような形で冬樹はへやに入り込む。

「うわぁ」

そこは研究室のようだった。

沢山の動物が檻に入れられ、まるで動物園のような雰囲気だ。

「あれ？」

だが冬樹は小さな違和感を感じた。動物達は異様な程静かだった。

冬樹が近寄っても、檻に手を入れても、頭を撫でてみても動かない。

鳴きもしない。

冬樹は首を傾げた。

【もしもし？ 皆さん聞こえますか？】

「その声は、モア殿？」

全力疾走していた小隊の面々は聞き慣れた声に立ち止まる。

【おじさま！！ 良かった。無事なんですね？】

「もちろんでありますよ」

「それでなんの用だ？ モア」

【はい。実は冬樹さんがダクトを降りたので報告させて頂きました。つてゆーか進路変更？】

「それで今どこにいるの」

【そこを真っ直ぐいって突き当たりから3番目の左のドアです】

「了解。感謝いたすでござる」

「それじゃモア殿。通信切っていいでありますよ」

【分かりました】

ケロロ小隊はまた走り出した。

「まるでこの動物。感情が無いみたいだ」

「よく気付いたな。地球の少年」

冬樹は身を震わせ振り向く。

「お前の頭脳は正直こちらの想像以上だな」

「ユウマさん」

白衣を羽織ったハルを冬樹が注視した。

「なにかな」

「あのこの動物達はいったいなんなんですか？」

「私の実験材料だ。特殊な電波を使い感情を刈り取った。本能と共にな」

「感情を刈り取る？」

怪訝な顔を見せる冬樹にハルはニマリと笑いかけた。

「そつだ。この電波を明日の朝全宇宙に流す。そして完璧な世界を作り出す」

「どついう事ですか？」

「冥土の土産に教えてやる。感情も本能も無くなれば争いも、諍いも起きなくなるだろう？　もちろん嫉妬も怨恨も。そういう世界を作るのさ」

「ちよつと待つてください！！」

冬樹が大きな声を出す。

「そんなことしたら、何もかも無くなっちゃうじゃないですか！！」

「何もかも？　友情や恋やらの事か？」

「はい」

ハルは嗤い出した。

「下らない。そんな感情完璧な世界のためなら不必要な物だ！！」

「そんな事」

「もう良い。お喋りの時間はおしまいだ。オート、実験を開始する。

コイツを拘束しろ」

『yes master』

冬樹に襲いかかるのは真つ白い包帯だった。

「ちよつと待ったあー」

「何者だ」

ドアを開け現れた5つの影。

「軍曹！！　みんなあ！！」

「今度こそ助けに来たでありますよ。冬樹殿」

ケロロが冬樹に笑顔を見せる。

「貴様の目的は全て聞かせてもらった」

ギロロがハルに睨みを効かせる。

「そんな事ボク達が絶対にさせないですっ」

タママのドングリ目が尖る。

「お前の理想で生き物を壊させたりはしない」

弥々華の双眸がハルをねめつける。

「だから拙者」

「ケロロ小隊、出現であります！！」

「ひどいよ……ケロロ君」

ケロロの言葉に3人が応える。

「小賢しいが邪魔はさせん。オート、セキュリティシステムを最大にしろ!!」
そして……」

ハルの目が見開かれる。

「強化服を出せ。私がこいつらを始末する」

『 yes master 』

次の瞬間、ハルの体が光で覆われた。

「なんだ……」

光が晴れた先に現れたのは狼を彷彿とさせる赤い鎧を纏ったハルの姿だった。

「さて諸君。諸君にはさつさと死んでいただくことにするよ……新世界はもうすぐだ、父さん」

T o b e c o n t i n u e d

Episode:5 scheme ハルの野望(後書き)

ケロロ小隊はハルの野望を打ち砕く事が出来るのか？

そしてハルの真意とは。

クライマックスに向け事態は動き出す。

次回Episode:6もお楽しみに。

感想をお待ちしています。

荒らしを除く批評や一言からでも構いません。

Episode:6 last battle 最終決戦(前書き)

ハルvsケロロ小队。

軍配はどちらに？

そしてハルの目的とは……

Episode : 6 last battle 最終決戦

赤い影と黒い影。2つの影が交錯する。
噛み合うの刃。じりじりと耳障りな音。

赤い影の後ろに2人のケロン人。

放たれる薄桃色と黄色いビーム。

「シールド展開」

ハルの指示により透明な障壁が展開、阻まれる光線。

「気を取られている場合か？」

ビームソードを捌き、弥々華の黒白風華の剣先が地面に当たる。

「地球人」

高く振り上げられた足が弥々華の顎を打つ。

「邪魔だ」

真横に撃ち出された銃弾がドロ口の足元に被弾する。

状況は圧倒的不利だった。

Episode : 6 last battle 最終決戦

「冬樹殿！！ 大丈夫でありますか」

地上2m程の場所で白い拘束帯に縛られた冬樹が視線を下にやる。

「軍曹！！ みんなは……みんなは？」

「今あいつと戦っているであります」

ケロ口は冬樹を見上げる。

「冬樹殿は必ず助けるであります。だから……心配しないで。冬樹殿」

全く腹立たしい。

クルルの舌打ちが部屋を瞬間的に満たす。

その後部屋を覆うのはキーボードを打ち込むカタカタと言う音だ。

「こりゃ自立プログラムか。厄介な物作りやがって」

ハッキング合戦においてはいくら自立プログラムとは言え誰かしら操作者が居ることが多い。だが今は違う。

ここまで素早い演算速度を持つ100パーセント自立するセキュリティプログラムはクルルもお目にかかった事は無い。

自身が作ったものを除いては……。

「ハッキングプログラム」 『オメガ』 『デルタ』 『アルファ』 を同時起動

その言葉に答えるように現れる3つの光学式キーボード。

「コンピューターウイルス」 『966』 を始動

クルルの階級章を模した渦巻きマークが画面に現れる。

「サア……逆転劇の始まりだぜエ? 社長さんよ」

弥々華とドロ口の斬撃が、ハルのシールドを同時に襲う。

はじかれ、壁を蹴る2人。

さらに隙間から襲うライフルのビームもタマママのインパクトも全てを受けきるシールド。

「硬すぎじゃね?」

弥々華が呻くように呟くと、シールドをすり抜けようと一気に距離を詰める。

「タママー！ 来い」

「ハイですう！！」

タママを片手に乗せシールドを蹴飛ばしさらに上昇。
天井に背中が接する。

「撃つてえー！！」

「た…… タママインパクト！！」

ギリギリでの疎通。

撃ち出されたインパクトを抑えるようにシールドが収束する。
横が、がら空きになった。

「今だ！！行つけえー」

「言われなくても」

「心得ているでござる」

ギロロが横から走り込みライフルを乱射。ドロロも斬撃の雨を振らせる。

「ぐっ……」

真後ろに吹き飛ばされるハル。シールドはタママインパクトを受け止めたまま動かない。

「タママ。そのまま撃つとけよ」

タママを離すと、弥々華は瞬間移動。それと同時にライフルを抜く。
着地。

弥々華の背中でシールドが壊れる音がした。

ハルの首元に突きつけるのはライフルと黒白風華。

「チエツクメイト…… 降参しろ！！」

「ふふふ……」

急に笑い出したハルに弥々華は面食らった。

「何がおかしい？」

「おいおい…… これで終わったと思ったか？」

「何！？」

「オート！！ セキュリティーシステムフェイズDに入れ」

『…………… yes…………… master……………』

ドアを開け、現れたのは

「またか」

「いい加減しつこいですよお」

先ほど一行を襲ったロボット集団だった。

「やれ！！ お前ら。こいつらを始末しろ」

【待ちなア】

「その声は」

不意に全員の頭上から響く陰湿な声。

「……」 クルル（先輩！！/殿ノ！！）「……」

【そこまでだぜエ？ ハル＝エメリツヒ・ユウマ】

「なんだ？ オート！！ こいつの通信を排除しろ」

【お〜つと……それは無理だなア】

「何！？」

焦燥するハル。その姿が見えているかのような嘲笑が空気を揺らす。

【このビルを管理してやがった自立プログラムは俺が壊した】

「オートを……壊した？ そんな事あるはずが無い」

【その証拠にそこにいる警備ロボットもじきにイっちまっただろうな

ア】

「見る！！」

ギロ口が指さす先には音を立て人形と化す警備ロボットの姿。

「何故だ……何故私の計画が……何故私の邪魔を」

へたり込んだまま青ざめるハル。

「ふふふふふ……」

「何笑ってる？」

急激に笑い出した春に弥々華は一步後ずさった。

「はははははははははははははははははははははははははははははあは

はははははははははははははははははははははははははははははははははは

はは！！」

【遂にイカレやがったか？】

「残念。私はまだ正気だよ？」

ただなにも策がない訳じゃ無いも

のでね。勝ち誇ってるお前等が可笑しくなったのさ」

笑みを残した顔で立ち上がるハル。

「父さんの遺産を壊しやがって……この報復はたっぷりさせてもら
うよ」

「待て！！ 動くな！！ 動いたら撃ち殺す」

「うるさいな。黙れよ」

弥々華が構えたライフルに手をかけるハル。

「心なんて……この世界に心なんて不完全な物は消す。それが私の
望みだ」

そう言うつと強化服の腕に付いたコンソールを開く。

「これで計画は完成する。私をもっと早く撃てばこんな事にはなら
なかつた。残念だったな？」

弥々華は魅入られたように動かない。

「まだだ……まだ終わってないでありますよ！！ ハル殿」

「まだ邪魔者がいたか！！」

「ケロロ？ 何をするつもりだ」

隣に冬樹を従えたケロロはきりりとした顔で声を張り上げた。

「弥々華殿！！ 頭を使つてあります！」

弥々華の目から靄が消える。
振りかぶる頭。

ゴン！！

鈍い、鈍い音がなった。

ハルの手がコンソールから離れる。

「今だ！！ 抑えろ！！」

ギロロの声で全員がハルを取り押さえる。

弥々華の黒白風華がコンソールを射抜いた。

「これでもう終わりでありますよ……ハル殿」
俯くハル。ケロロ小隊の面々からは顔が見えなかった。
「降参だ。もう何も出来ないよ」

数十分後。

play hose company社屋・屋上ではケロロ小隊の
面々と宇宙警察官ポヨンの姿があった。

「ハル」エメリツヒ・ユウマ。宇宙法複数違反により逮捕するポヨ
そう言つて掛けられたのは白銀の手錠。

「みなさん、こんな隠れた凶悪犯を逮捕出来たのは皆さんのお陰だ
ポヨ。本当に感謝しているポヨ」

ニコニコと微笑むポヨンの手にはオートシステムの監視カメラ映像
を記録したMDが握られていた。

「いやあ、我輩達も苦労したのでありますよ」
そう言つてケロロはポヨンに手を伸ばす。

「なんだポヨ？」

「報酬とか……ないでありますか？」

「そんなものあるわけナイぽよ」

「えええー……そんなあ」

へたり込み喚くケロロ。それを見て頭を殴るギロロ。

「それじゃご協力感謝だポヨ」

そうとだけ言い残しポヨンは宇宙船へと姿を消した。
冬樹を除く全員が敬礼でそれを見送る。

完全に宇宙船が見えなくなると冬樹とケロロはほほえみあった。

「さあ帰るでありますかあ。冬樹殿？」

「そうだね。軍曹」

冬樹とケロロは手を取り合い宇宙船の中に消えた。
宇宙船が夕焼けの中を飛ぶ。

目指すは日向家。

そうして事件は幕を閉じた……はずだった。

「ごめんなさいでありますよお夏美殿」

「帰ってきたら冬樹はいないし部屋は汚い食器は洗ってない……いたいという事かしら？ ポケガエル」

「まあまあ……姉ちゃん。僕も助けてもらったし。もう止めてあげたら？」

「しかも冬樹まで命の危険に合わせて！！ いったい何やってんのよ！！ ポケガエルう」

「あーあ、軍曹さんも大変ですねえ」

「そうだな」

「ま……しょうがねえんじゃねエの？」

「隊長らしくて……イイかもね？」

「それじゃボク帰るですう。モモッチが心配してるですから
そう言つてタママが超空間移動で姿を消す。」

「俺もラボに戻るわ」

クルルもギミックで姿を消した。

「それじゃあたしも Apd sco に帰るね。疲れちゃった」

弥々華は小さく微笑むと瞬間移動でいなくなる。

「拙者も小雪殿が心配しておられる故。さらばっ」
ドロロもまた家路に付いた。

1人残されたギロロも無言で自分のテントに戻っていく。
そしてこんどこそ、事件は幕を下ろしたのだった。

『Auto system restart』

誰もいなくなつたはずの室内に機械的な音声が響く。

『recovery system start』

まるで木々が枝葉を伸ばすように広がる照明。

『system all green』

廃墟と化した室内が開業時と変わらぬ明るさを取り戻し、穴の開いた壁や床すら修復される。

『As for the order?』

御命令は？

今はいない主を捜すように、オートはただ叫び続けた。

To be continued?

E p i s o d e : B A N G A I P o s t s c r i p t

後書き(前書き)

ケロロ、クルル、作者でお送りする対話文。
大事なお知らせがありますのでこー読を。

(原作のネタバレがあります。アニメ派の人は要注意を)

「さて皆さんこんばんは。我輩はケロロ軍曹であります」

「同じくクルル曹長だぜエ」

「本日は『超小説版ケロロ軍曹 + black & white であります』を御愛読くださりほんとうにありがとうございます。であります」

「こんな作者のクソみてえな小説よく読めた」

「ちよーつとストップストップ！！ 待つてくださいクルル」

「あ？ なんだよ作者か」

「皆さんこんばんは。私が作者の百花ですってそうじゃないって」

「おおノリツツコミでありますな」

「んだよ。クソみてえな小説っていったのがマズかったのか？」

「そうです。次回作も控えてるのにクソみたいはまずいでしょ。確かにクソは認めるけどさ」

「ちよつと待つてであります。作者殿。次回作って何の事でありま
すか？」

「ふっふっふ。聞きたいですか？ ケロロ君」

「もちろんであります」

「それでは発表します。ケロロ軍曹クロスオーバー小説第二段の制作が遂に決定しました！！」

「おおっ！！ それはほんとでありますか？」

「もちろんですとも。タイトルは『Cross world 交錯する世界』です！！」

「それでクロスオーバーするお相手は？ 誰なんでありますか？」

「はい。クロスオーバー作品は私のオリジナル作品『black and white』・週間少年ジャンプより『BLEACH』・ジャンプスクエアより『D・Gray-man』の3作品です！！」
「くっくくく。どっちもジャンプから持ってきたのかよ」

「つまり次作ではケロ口軍曹も合わせて4作品のクロスオーバーと
言うことになるんです」

「凄いですな。そしてストーリーは？」

「えっと大まかにしか決まっていなくてもいいんですが、決まっていることは
ですね」

1 舞台は奥東京市

2 BLEACHとD・Gray-manのキャラクターが奥東
京市に現れる

3 主人公は続投

4 ラストボスはオリジナルキャラクター

って所までは決めていきます。後は未定かな

「んで？ 掲載時期は？」

「はい。早くて7月31日。遅くても8月1日までには何かしらの
原稿を上げる予定です」

「なるほどでありますな」

「っとまあ決まっているのはこんなところかな」

「それではすぐに続編を書かなければダメでありましょ？」

作者

殿

「うん……まあそうかもね」

「よし。それじゃクルル！！」

「了解だぜエ」

「ちよつとなににすんですか！！」

あんたらって……うわああああ

！！！！

(作者強制退場させられました)

「っとまあこれでやることは全部でありますな」

「そうだな、それでは皆さん、次回作『Cross World

』交錯する世界でお会いしましょう」

「また会う日までさよーならあーであります」

いかがでしたでしょうか。

超小説版ケロロ軍曹 + black & white であります。

皆様お楽しみ頂けたでしょうか？

もしも楽しんで頂けたのなら作者は泣くほど嬉しいです。

次回作を決めてしまいました。これには理由がありました。

第一にこの話の後日談が欲しかったこと。

第二にケロロ小隊やオリジナルキャラクターをもっと活躍させたかった事。

第三にこの世界観のままいろいろな話を作りたかった事があります。設定はアニメベースですがケロロの「超隊長命令」やドロロの「暗殺兵・白兵戦鬼式」もやりたかったですし、出したいオリジナルキャラクターもいましたから。

とにかく全てが未定な次回作も楽しみにして頂ければとても嬉しいです。

最後に本作のオリジナルキャラクターについて少し。

オリジナルキャラクターのハル「エメリツヒ・ユウマの名前は2001年宇宙の旅のHAL9000、オートシステムはデズニープ

サー映画のWALL・Eノウリーのオートから頂きました。

オートに付いては次作も続投する予定です。

それでは皆さん、ここまで読んで頂き本当にありがとうございました。

精一杯の感謝をあなたに送ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7666m/>

超小説版ケロ口軍曹 + black & whiteであります

2010年11月25日19時25分発行